
しにがみ様と亡きセカイのためのパヴァーヌ

碓氷みやび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しにがみ様と亡きセカイのためのパヴァーヌ

【Nコード】

N26510

【作者名】

碓氷みやび

【あらすじ】

主人公・波多野蘭は、普通の高校に通う、普通の女の子。しかし、彼女には”しにがみ”が見えるという特殊な能力があった。”しにがみ”であって、”死神”ではないと公言してはばからない（といっても、普段普通の人には姿が見えないのだが）しにがみ様は、幼いときに両親を亡くした蘭の歳の離れた兄・波多野駿として暮らしていた。本来死を迎えているはずの彼女と、本来死者を”あの世”へ送るはずのしにがみ様。交わらないはずの2人の運命が交わったとき、セカイに訪れるのは、終わりか、それとも祝福か…。

しにがみ様と私のためのワルツ

私の中の、一番古い思い出。

それは、真っ黒の世界だ。

二つ並んだ、遺影の中できれいに微笑む男の人と女の人をぼんやりと眺めて、ぽつんと一人で狭くもない部屋の真ん中で立っている。周りには誰もいない。真っ黒のジャケットと、真っ黒のスカートに真っ黒の靴や靴下。髪飾りまですべてが黒。私の心の中にも、真っ黒な塊が重くのしかかっている。

『……………交通事故ですって』

『…まだ蘭ちゃんも小さいのに…これからどうするのかしら…』

『……………まだ貰い手も見つからないんだよ』

『…お前が引き取ってやれよ、金だって腐るほどあるんだろう？』

『…うちは無理だよ…子供いるし』

ドアの向こうでひそひそと大人達がこんな会話を途切れることなく話し続けている。…分かってる。大体私のことについてだってことは。私には、もう帰る家も、頼れる大人も、お金も、両親も何も残っていない。それくらい、10歳の私には悲痛なくらい分かっているのに、大人達は分かっている。幼い私の気持ちなんて。

…悲しい。

もうおとうさんも、おかあさんもいない。

何もしてくれない。

何も教えてくれない。

悲しいのに、涙は出てこなかった。

辛いのに、涙は出てこなかった。

感情はあるはずなのに、麻痺していた。

辛すぎて、何が起きているのか分からなかった。

…胸が痛い。

まるで、誰かが強く握っているかのように…。

その時だった。

目の前が急に漆黒に染まり、不意に、強い風が部屋の中に吹き込んできた。気を緩ませると吹き飛んでいってしまいそうなくらいの突風。なのに、祭壇に並んだ二つの遺影や部屋の中にある物はびくともしていない。

「くっ……!!」

私は飛ばされないように、必死に床にしがみついた。それをあざ笑うかのように、風は強さを増していく。

……どれくらい、床に伏せていただろうか。

長い時間、しがみついていたような気がする。いきなり風がピタリとやんだ。顔を上げると、そこは、今まで自分が立っていたあの部屋ではなく、何もない、真っ黒な世界だった。

何も見えない。しばらくすれば目が慣れて、なんとなく見えてくるだろうと思って目を見開いていたが、一向に目は慣れた気配を見せない。見える景色はいつも同じ、漆黒の闇だった。

恐怖。

体中を恐怖が包み込んで、鳥肌が立った。

「……ふ……え……」

僅かに開いた口から漏れるのは、ヒューヒューという荒い呼吸に、奥歯がちがちとなる音、そしてあまりに小さすぎる悲鳴だけ。恐怖に全身が支配されて、へなへなと力なく地面に座り込んだ。座り込んでも、震えは止まらない。

怖い。

怖い。

怖い。

何が起きているのか、なぜ自分がここにいるのか、疑問が頭の中をぐるぐるとめぐる、ますます恐怖に蝕まれていった。

：ひらり、と黒い世界には似合わないくらい、真っ白できれいなものが、視界の中に現れた。：羽だ。きれいな、鳥の羽だった。

地面に落ちた、羽を拾おうとしたそのとき、

「：お前」

はつきりとした声が暗闇の中から響いた。

顔を上げてその声の主を探した。けれど、見えるものは何も変わらず、延々と続く闇だけだった。

「：…だ、誰っ」

勇気を振り絞って声を張り上げた。自分の声がこだまして、遠くのほう間で広がっていく。

「：俺か？」

また、声が聞こえる。すごく低くて、闇に飲まれてしまいそうだけど、はつきりと聞こえる、声。

「そんなことはどうでもいい」

「：だ、だめっ」

考えるよりも先に声が出ていた。

「？ 何故だ？」

「：そ、それはっ…」

「お前には関係ない。俺が、どんな存在であっても、お前に必要のない情報だ。 聡明なお前なら分かるはずだ」

そーめい、という意味が分からなかったけど、言葉からして、『関係ないから黙れ』といっているような気がする。

「：お前」

静かに、闇の中の人は私に問い始める。

「：お前は世界を恨むか？」

「：お前は世界が憎いか？」

「…お前は世界を壊したいか？」

「…お前は世界に何を望むか？」

…長いこと問われていた気がする。難しい言葉ばかりで、なんと答えたか、幼い私は覚えていない。

でも、最後に問われたことは、しっかりと、鮮明に覚えている。

「…それでもお前は、この世界で生きていたいと願うか？」

「………はい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2651o/>

しにがみ様と亡きセカイのためのパヴァーヌ

2010年10月11日23時16分発行